

vol.48

偉人と私

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

歴史上どれだけ偉大な人物であっても、腕も脚も二本だし、目も二つで、普通の人と変わらない。一皮むけば我々と等身大の小心者であり、個人的なコンプレックスが歴史を動かす原動力になったはずである。一九世紀の哲学者、芸術家たちのあいだでは、「ナポレオンと私」という問題系が共有されている。ナポレオンより一歳年下の有名人が二人いて、一人はベートーヴェン、もう一人はヘーゲルだ。この二人はナポレオンの登場によって「やっと私たちの時代が来た」と思った人たちで、「これで歴史は変わる。今まで封建領主の顔色をうかがいながらやってきたが、これからは好き勝手にやっていいんだ」と盛り上がったはずだ。ベートーヴェンはソナタ形式を拡大してそれまでの音楽を改革したし、ヘーゲルはナポレオンに鼓舞されるように歴史哲学を編み出した。

二〇世紀の歴史を語る際には、ヒトラー、スターリン、毛沢東を避けては通れない。そういう「偉人と私」、「国家と個人」という関係性に基づいた作品には傑作が多いという法則はある。資料を駆使して歴史を浮き彫りにする歴史家の手法とは違う小説家の書き方があり、それは歴史の現場におのが身体や意識を置いて、同時代人のふりをすることに近い。

昨今、当事者性という問題が盛んに議論の俎上そじょうに上る。作家たちはポリコレを気にするあまり、自分が当事者でない事象を書くことに躊躇する傾向がある。しかし、それを気にし出したら、自分の経験や属性に限定して書くことしか許されなくなり、極端な話、男が女の話を書くなどということになってしまう。むしろ、他者のことを書くのが小説であると、逆に定義し直した方がいいくらいである。当事者性を突き詰めれば、「難民でない自分には難民の気持ちなどわからなくて当然」というような冷淡な立場を正当化することになりかねない。私たちは偉人や難民、外国人の気持ちを完全に理解できないとしても、彼らの靴を履き、眼鏡を借り、彼らの立場に置かれた自分を想像するように他者を見ることはできる。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授